

名古屋大学文学部美術史学教授  
プロジェクト共同研究者  
担当地域：フランス  
木俣 元一

フランスを代表する美術史家ダニエル・アラス(1944-2003年)の著書『Détails(細部)』(1992年)では、イタリア語の「パルティコラーレ」と「デッターリオ」という用語を使って美術作品の細部を2つに分類している。前者は単純に、描かれた人物や事物、あるいは作品全体の小さな部分のことを指す。「まなざし」の歴史に挑むアラスが目指す後者は、作者であれ鑑賞者であれ、ある主体が細部を作り出す注視や切断等の行為の結果として生まれてくるものを意味する。

カメラで作品の一部をクローズアップして撮影する行為も、この「デッターリオ」に対応する。辻佐保子氏が撮影したスライド画像のアーカイヴには数多くの細部が含まれ、これらは著作や論文で公表された図版では見えにくい、1人の傑出した美術史家の「まなざし」を跡づけるとても貴重な資料だ。このような観点から私がとくに関心を持ったのは、平面的な作品よりも、彫刻という立体物を撮影した画像である。

辻氏は、1971年秋に名古屋大学文学部に赴任したが、その翌年の講義で早速アンリ・フォションのロマネスク彫刻に関する著書(1931年刊)を取り上げ、その邦訳を1975年に中央公論社から刊行している(『ロマネスク彫刻—形体の歴史を求めて—』)。また1976年には、小学館の世界彫刻美術全集の第6巻として『ロマネスク』を出版した。1970年代前半にはロマネスク彫刻に関心を持ち、多くのモニュメントを訪ねていることが、辻氏の取材ノートからもうかがわれる。おそらく、この時期の調査旅行における辻氏の重要な関心事の1つは、当時翻訳に取り組んでおり、刊行から40年以上を経た「現在もなお私たちが最もしばしば立ちもどり、新たな問題を解く糸口を見つけるのは、他ならぬフォションの著作だ」と邦訳の「あとがき」で評したフォションの預言的思考を現場で確認することであったと推測される。

辻氏の撮影した彫刻の細部画像には、独自のアングルから対象を捉えているものはいくつか見られ、その作品の思いがけない姿を浮かび上がらせている点に強い感銘を受けた。ここでは、その代表的な事例を2点紹介させていただくことにしよう。

まず、ヴェズレー、サント=マドレーヌ聖堂ナルテックスのチュンバスムの中央に位置する、「聖霊降臨」の巨大なキリスト像を斜め右下からの視点で撮影した、驚くべきスライドを挙げたい(図1)。このヴェズレーのキリスト像については、ほかならぬ辻氏が翻訳したフォションの著作に、その肉づけと光線の扱いに関する精緻きわまる形体論的分析が見られる。辻氏撮影の画像は、フォションの観察がある部分では正確でありながら、ある部分では重要な見落としを含んでいることに気づかせてくれる。というのは、その画像からは、「ほとんど偏平で線刻的なこの神」というフォションの記述はたしかにその上半身には当てはまるが、下半身については、ほとんど丸彫りに近い実体感が与えられているのがわかるからだ。フォションは、キリスト像の表面に刻まれた襷の線刻の網目が「光線を捕囚にすることの効果」、「肉体の充実感を彫金師的な仕上げによって暗示している」と述べている。ところが、実際には少なくともキリストの下半身では、キリストの左脚の上に右脚が重なって相当な厚みを与えられ、偏平な上半身との対比

により、ある種の遠近法的効果が生み出される。辻氏のこのスライドには、ファッションの見事な記述を自らの眼で検証しようとする強固な意志が感じられ、その批判的な「まなざし」の痕跡がそのまま定着されていると言えよう。

さらに美術史家としての「まなざし」が感じられる、非常に興味深いスライドとして、もう1点、アヴァロン、サン=ラザール聖堂扉口の人像円柱の上半身を右側面からのアングルで撮影したものに言及しておきたい(図2)。辻氏の取材ノートによれば、1973年8月27日(月)朝にパリを出発し、同日アヴァロンを訪れている。このスライドはその時に撮影されたものかもしれない。この像については、同じようなアングルによるスライドが他にも2点残っていることから、辻氏がこの像のこの眺めに明らかに強い関心を寄せていたと考えてよい。この視点の選択によって、アヴァロンの彫像の身体が、その頭部の立体感に比して、驚くほどに薄いということをはっきりとしたいという意図があったように思われる。ここに、ジャルトルやサン=ドニといったフランス北部における同時代の作例を含め、一連の人像円柱がロマネスクの終わりなのか、ゴシックの始まりなのか、そしてブルゴーニュとフランス北部の関係はどのようなものなのか、その歴史的位置づけに関するファッションの議論に回答するヒントが隠されているという鋭い直感があったものと想像される。



図1 ヴェズレー、サント=マドレーヌ聖堂ナルテックスのチュンバスム部分



図2 アヴァロン、サン=ラザール聖堂扉口の人像円柱(部分)

立教大学文学部キリスト教学科教授  
プロジェクト共同研究者  
担当地域：イタリア(ナポリ、シチリア他)  
加藤 磨珠枝

今回の辻佐保子先生旧蔵スライド・デジタルアーカイヴプロジェクトは、私にとって単なる資料整理ではなく、中世美術史家としての彼女の功績を振り返り、遺跡や教会堂、風景へ向けたまなざしを追体験し、また、教材用スライドの分類法を知る、今は亡き先生との対話の機会であった。この貴重な体験を通じて印象に残ったエピソードをひとつ紹介しておきたい。

私がアーカイヴを担当した「C-5」の分類番号をもつスライド箱についてである。そこには総数203枚に及ぶスライドが含まれ、冒頭はクノップフ、ミュシャ、モローなど、19世紀から20世紀初頭の画家たちの作品複写がまとめられていたため、おそらく美術史概説用の教材か何かであろうと最初は軽い気持ちで眺めていた。しかし、偶然目に留まった3枚のスライドから、思いもよらない新たな世界へと誘われていった。

その3枚のスライドとは、フランスの小説家マルセル・プルーストが描いたデッサン群である。書籍から複写した図版であるため、画像資料としての価値は副次的だが、フィルムを挟むマウント上には、佐保子先生の筆跡で「③①プルースト ランのステンド・グラス デッサン」「③②プルースト デッサン アミアンの聖堂」(図1)、「③③プルースト リオン聖堂 ノートル・ダム・ド・パリ」とメモ書きがあった。画家でもない文筆家の素描が、なぜ、ここに含まれるのかを疑問に感じた私は、はっとあることを思い出した。

それは、佐保子先生の夫君である辻邦生先生が、かつてプルーストの世界に没頭し、小説創作に大きな影響を受けたという逸話である(『啓示としてのプルースト』『永遠の書架にたちて』所収)。こうして生み出された彼の作品で、もっともプルースト的といわれるのが、最初の長編小説『夏の砦』(1966年刊)だ。実はこれに関しては、後に『婦人之友』(1995年)誌上の連載で、興味深い創作秘話が明かされている。

それによれば、『夏の砦』の主人公、支倉冬子の描写には、妻(佐保子)の語った幼年期の思い出が、詳細なディテールにまで反映され、「心ひかれる女性」の間接的なモデルにされていたというのだ。これについては佐保子先生自身も、この小説に「自分が幽閉されているように感じる」(『たえず書く人』辻邦生と暮らして)第1章)と述べるほどで、すなわち、プルーストと佐保子先生は、邦生先生の創作を

通じて融合され、一つの作品へと昇華されていたのである。

この複雑な三角関係に気づいて、あらためて前後に配列されたスライド群を眺めると、プルーストのデッサンの前には、彼が『失われた時を求めて』執筆前のスランプ状態の時に、創作

への靈感を受けたイギリスの美術評論家ジョン・ラスキンの素描16点も含まれていた(図2)。プルーストはラスキンに傾倒し、彼の本の叙述に従ってアミアンやヴェネツィアなど、ラスキン巡礼の旅に出かけただけでなく、彼の著作『アミアンの聖書』『胡麻と百合』の翻訳も手がけたことで知られ、先のプルーストによるデッサンは、この時期に描かれたものである。

要するに、このスライド箱のなかの一部には、美術史的な基準作ではなく、書くことを模索した小説家たちの靈感源を跡づける作例が集められていたのだ。また、各マウントには、通し番号が①~③⑧まで(一部欠番あり)付されていたので、講演会などで使用したものかもしれないが、その詳細(時期、場所)については調査中である。

その他、スライド群の最後には、辻先生ご夫妻がシチリア旅行の際に撮影した海岸風景やセリヌンテの古代神殿遺跡(図3)などのスライドも38点含まれていた。フィルムの右下の日付表示から、1988年6月19~20日の旅行時の撮影と推測される。それらの1枚は、断崖絶壁に建つ特徴的な立地から、エリチェのノルマン城(別名ウエヌスの城)(図4)と同定できるが、この神秘的な霧に包まれる城の風景は、邦生先生のシチリア紀行文『海に向かって、夏』の一節「エリチェに変幻する霧」で以下のように描かれている。

「昼食前にはあれほど青かった空は、あとからあとから湧き上がってくる霧に閉ざされて、何もかも掻き消される。教会も消え、断崖の途中に繁る木々も消え、下のほうの田畑も消え、ただ白い茫々とした霧のながれだけが走ってゆく。霧が薄れると、墨絵のように城や城壁が浮び上る。」「美しい夏の行方 イタリア、シチリアの旅」に所収)

スライド自体に、邦生先生は一度もその姿を現してはいない。それにもかかわらず、この古ぼけたスライド箱が、ふたりの思い出の詰まった宝箱のようにも見えてきた。

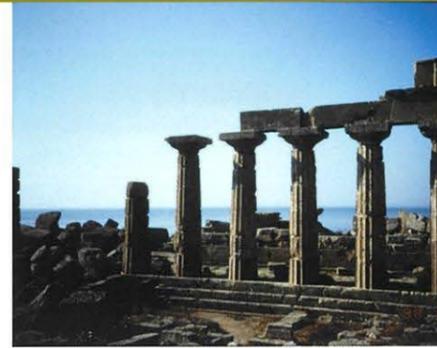


図3 シチリア、セリヌンテ C神殿の遺跡 1988年6月20日撮影



図1 マルセル・プルースト「アミアンの大聖堂」 1901-1904年



図2 ジョン・ラスキン「ルッカ、サン・ミケレ聖堂のファサード、小アーチ」 1845年



図4 シチリア、エリチェ ノルマンの城 1988年6月19日撮影

